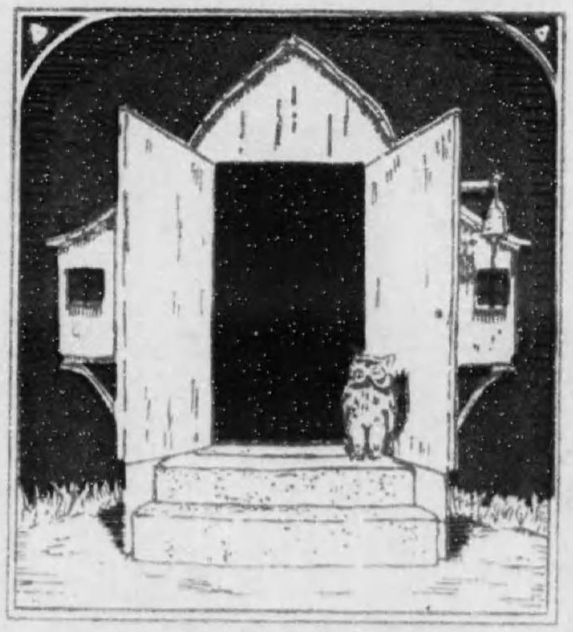
505
18

자 4G28
505-18

英國童謡集

北原白秋譯



白秋童謡集第三集

アルス刊

大正
10 12.23
内交

日本の子供たちに

はしがき

お母さん鷲鳥のマザア・グウスは綺麗な青い空の上に住んでゐて、大きな美しい鷲鳥の背中に乗つてその空を翔つたり、月の世界の人たちのつい近くをひようひようと雪のやうに明るく飛んでゐるのださうです。マザア・グウスのお婆さんがその鷲鳥の白い羽根をむしると、その羽根がや

はり雪のやうにひらひらと、地の上に舞うて來て、落るすぐにその一つ一つが白い紙になつて、その紙には子供たちの何より喜ぶ子供のお唄が書いてあるので、いぎりすの子供たちのお母さん方はこれを子供たちにいつも讀んできかして下すつたのださうです。今でもさうだらうと思ひます。それでそのお話をお母さんからうかがつたり、そのお唄を夢のやうに歌つていただいたりするいぎりすの子供たちは、どんなにあの金の卵を生む鵞鳥や、マザア・グウ

スのお婆さんを慕はしく思ふかわかりません。

ですが、ほんたうを云へば、そのマザア・グウスはやはり私たちとおなじ此の世界に住んでゐた人でした。べつにお月さまのお隣の空にゐた人ではありません。子供が好きな、さうして、ちやうどあの鵞鳥が金の卵でも生むやうに、ぽつとりぽつとりとこの御本の中にあるやうな美しい子供のお唄を子供たちの間に落してゆかれたのでした。ありがたいお母さん鵞鳥ではありませんか。

そのグウスといふお婆さんは今から二百年ばかり前に生れた方でした。そのお婆さんに一人の小つちやな孫息子がありました。お婆さんはその孫息子がかはゆくてならなかつたものですから、その子を喜こばせるためにその子の喜ぶやうな、さうしてその子の罪のない美しい夢をまだまだかはいい綺麗な深みのあるものにしてやりたいのでした。それでいろいろな面白いお唄をしぜんと自分でつくり出すやうになりました。やつぱりその子がかはいかつたのですね。

それも初めはただ何といふことなしに節をつけてお話したり、歌つたりしたものでせうが、さうしたものはどうしても忘れやすいものですから、また覺え書に書きとめて置くやうになりました。さうなるとまた、さうして書きとめて置いたのが一つ殖え二つ殖えして いつかしら一册の御本にまとまるやうになつたのでせう。

そのお婆さんの養子にトオマス・フリイトといふ人があ

りました。この人は印刷屋さんでした。で、そのお母さんが自分の息子のために歌つて下すつた、さうしたありがたいお唄を刷つて、自分の息子ばかりでなく、外の澤山の子供たちを喜ばしてやりたいと思つたのでした。それでこのマザア・グウスの童謠の御本が初めて刷られて、廣く世間に讀まれるやうになりました。それは西洋暦の千七百十九年といふ年で、時のいぎりすの王樣はヂョウヂ一世と申される御方でした。

で、このマザア・グウスの童謠はずいぶんと古いものです。古いものですけれど、いつまで經つても新しい。ほんとにいいものはいつまで經つても昔のままに新らしいものです。考へて見てもその御本が出てから、いぎりすの子供たちはどんなに仕合せになつたかわかりません。その子供たちが大人になり、またつぎからつぎにかはいい子供たちが生れて來て、またつぎからつぎに此のお母さん鵞鳥のねんねこ唄を歌つて大きくなつて行くのですそれに此の御

本が出てから仕合にされたのはそのいぎりすの子供ばかりではありません。いぎりすの言葉を使つてゐる國々の子供は無論のことですが、世界中のいろいろな國の言葉に譯されてゐますので、さうした國々の子供たちもみんな仕合にされてゐる筈です。それにいろいろ作曲されて、ずいぶん廣く歌はれてゐるやうです。ですから、赤い嘴と赤い水搔とを持つた鵞鳥のお婆さんがお椅子に腰かけて、同じやうな赤い小つちやな嘴と赤い小つちやな水搔とを持つた

小つちやな鵞鳥をお膝に載つけて、赤い御本を開いてゐる畫のついた表紙のや、三角帽のリボンに鵞ペンを挿したお婆さんが卓子の前に腰をかけて、何か書いてゐると、そのそばから大きな鵞鳥が嘴をあけて、針の頭のやうに眼を小つちやくして覗きこんでゐる畫のや、鵞鳥とお婆さんが空を翔けてゐるのや、緑色の牧草の中に金の卵を落してゐる白い雌鳥の鵞鳥のや、いろんな本が出てゐます。

日本ではこの私のが初めてです。日本の子供たちの爲め

に、私はこのお母さん鵞鳥を日本の空の上に來てもらひました。さうして空からひらひらとその唄のついた鵞鳥の羽根を散らして貰つたのでした。その羽根に書いてある字はいぎりすの字ですから、私は桃色のお月さまの光でひとつひとつ透かして見て、それを日本の言葉に直して、あなた方、日本のかはいい子供たちに歌つてあげるのです。そしてみんな歌へるやうに歌ひながら書き直したのですからみんな歌へます。歌つて御覽なさい。ずいぶん面白いから。

その童謠の中には、青いもえぎ色の月の夜にお月さまを飛び越える牝牛のダンスや、紅い胸の駒鳥が死んで白嘴鴉が御經を讀むのや、王樣の前のパイのお皿から歌ひ出す二十四匹の黑鶫や、『パンにお煎餅。』とうなるロンドンのお寺の鐘や、お家が大火事でブツヂングのお鍋の下にもぐりこむてんたうの娘や、赤い鯡に呑まれる黑ん坊の子供や、籠に乘つて青天井の煤掃しにお月樣より高くのぼるお婆さん、お靴の中に子供をどつさり入れて始末に困るお婆さ

ん、挽割麥を三斤盜んでお菓子をこさへる王樣や、拇指よりも小いさな豆つぶの且那さま、赤いお椀に乘つて海へ出るお悧巧さん、氣ちがひ馬に乘つて滅茶苦茶に駈けてゆく氣ちがひの親子、さうした、それはもうどんなに不思議で美くしくて、をかしくて、馬鹿々々しくて、面白くて、なさけなくて、怒りたくて、笑ひたくて、歌ひたくなるが、ほんとにゆつくりと讀んで、さうしてあなた方も今までよりもずつと變つたお月夜の空や朝燒夕燒の色どりを心にとめて、いつも美くしいあなた方のお夢を深めて下さるやう。さうなら私はどんなにうれしいかわかりません。

この本の中の童謠は重にそのマザア・グウスから譯したのですが、その外にもいぎりすの子供の歌つてゐるので違つたのが澤山附け足してあります。いろんな指遊びや、顔遊び、めくら鬼、梯子段遊びなど、日本のと違つた遊戯唄をおしまひの方に載せて見ました。皆さんで一つやつて下さるとうれしいと思ひます。

これからもまだいろんなものを皆さんのために書いてお贈りしたいと思つてゐますが、私もこれからほんとに念を入れて、鶯鳥が金の卵を生み落すように、ほんとにいい童謡をぽつとりぽつとりと落してゆきたいと思ひます。

では、どうぞ、此の本の初めにあるその金の卵の謡から讀んで行つて下さい。するときつと鶯鳥があなた方を背中に乗せて、高い高い お月さまのそばまで 翔けてゆくでせう。

大正十年九月

木兎の家にて

白秋

しるす

まさあ・ぐうす目次

駒鳥のお葬式……一
お月夜……八
天竺鼠のちび助……一〇
木のぼりのお猿……一三
胡桃……一七
孟買の肥満漢……一九
六片の歌……二〇

一時……二三
卵……二四
朝焼夕焼……二五
風が吹きや……二六
文なし……二七
ファウスト國手……二九
とことこ床屋さん……三〇
お靴の中に……三一
一つの石に……三三
コール老王……三五

雨、雨、行つちまへ……三七
花壇に豚……三八
日の照り雨……三九
セント・クレメンツの鐘……四〇
荆棘のかげに……四六
お馬乗り……四七
小徑に娘……五〇
月の中の人……五一
十人の黒坊の子供……五二
お月さまの中のお仁が……五九

クリスマスが來やすわい……六〇
べああ、べああ、黑羊……六二
蠟燭……六三
小ちやなライ・ウイ……六四
三月、風よ……六五
お面持……六六
獅子と一角獸……六八
靴屋さん……七〇
綺麗な頸卷……七一
何人何匹何囊……七三

飲むもの……七四
かはいい小猫……七五
雨模樣……七七
ポウリイ、藥罐を……七九
南瓜つ食ひ……八一
ぼう、うおう、うおう……八二
三百屋……八三
お釘が減れば……八四
二十四人の仕立屋……八六
蝸牛角出せ……八七

お針見つけたら……八八
風よ吹け吹け……八九
氣輕な粉屋……九〇
お籠の婆さん……九二
田舍漢……九四
素つ頓狂な南京さん……九五
鼻曲り……一〇三
あの丘のふもとに……一〇四
ゆりがごうた……一〇六
あたいの牝牛……一〇七

小びつちよの子供は……一〇九
ねんねこうた……一一一
はしつこいヂャック……一一三
蝸牛、でむし……一一三
一列こぞつて……一一四
蝸牛……一一五
お悧巧さん……一一六
おしやべり……一一八
ハアトの女王……一一九
コケコッコ踊……一二一

でんでんむしむし……一二五
お婆さんと息子……一二六
てんたう虫……一二七
暖かい麵麭……一二九
ゴオサムの三悧巧……一三〇
氣ちがひ家族……一三一
一つの樽に……一三三
小ちやな旦那さま……一三五
ヂヤックとヂル……一三七
トムトム坊主……一三八

犬はぼうわう……一三九
小さなお嬢つちやん……一四一
藪醫者……一四二
綺麗好きのお神さん……一四四
御婚禮……一四七
タツフイ……一四八
婆ア牛……一五〇
とつぴよくりん……一五一
卵賣りませうと……一五二
鵲が一羽よ……一五三

これ、これ、小意氣な……一五五
市場へ市場へ……一五八
數學……一五九
眼……一六〇
ABC……一六一
五月の蜜蜂……一六二
朝のかすみ……一六三
かつこ鳥……一六四
豆小僧……一六六
蛙の殿御……一六七

ロンドン橋……一七三
ソロモン・グランデイ……一七七
世界中の海が……一七九
空はじめじめ……一八一
一切空……一八三
がぶがぶ、むしやむしや……一八四
アアサア王……一八五
天竺鼠は……一八七
ヂヤック・スプラットと……一八八
俺がお父は……一八九

背骨曲り……一九三
猫と王様……一九五
がアがア、鶯鳥……一九六
火の中に……一九八
火箸の一對……一九九
お月さま光る……二〇〇
玩具の馬……二〇二
泣け泣け……二〇五
北風吹けば……二〇六
めくら鬼……二〇八

お山の大將……二一〇
上へ行つた……二一一
みんなして森へ……二一三
この豚、ちび助……二一三
お沓を穿かしよ……二一四
長い尾の豚に……二一五
上つた、上つた……二一六
一、二、三、四、五……二一八
足……二一九
顔あそび……二二一

この呼鈴……二三
一番目のお床……二三
おしまひ……二四

挿畫目次

母鶯鳥の歌（三色版）……口絵
お月夜（三色版）……九
六片の歌（三色版）……二一
月の中の人（三色版）……五三
お籠の婆さん（三色版）……九三
ハアトの女王（三色版）……一一九

箱、見返、扉畫。

恩地孝四郎氏

母鵞鳥の歌

母鵞鳥のお婆さん、
いつも出あるくその時は
綺麗な鵞鳥の背に乗つて、
空をひようひよう翔けてゆく。

母鶯鳥の住む家は
一つ、ちんまり、森の中、
戸口にや一羽の梟が
見張りするので立つてる。
息子がひとりで名はヂャック、
その子まづまづお人よし、
ずんといい事せぬ代り、

づるい悪さもよう爲得ぬ。
市場へヂャックをやつたれば、
雌の鶯鳥を買うて來る、
「まあまあ、お母さん、見ておいで、
そのうちいい事もあるでしよよ。」
それから鶯鳥の雌と雄

仲よし小よしで遊んでる。
いつも一緒に餌をたべて、
ガァガァ、お池におよいでる。

ある朝、ヂャックが行つて見りや、
（ほんに話によく聞いた、）
金の卵がありまする。
生んでくれたは雌鶯鳥。

金の卵だ、早よ告げよ、
ヂャックはお母さんへ飛んでゆく。
お母さんもほくほく御機嫌だ。
「それはよかつた、大出來じゃ。」
ヂャックは卵を賣りに出る。
それを買はうと猶太人の惡者、
思ふ半値もつけせんで、

うまうまヂヤックをちよろつまかす。

ヂヤックはお嫁取りに行きまする。
向うのお孃さん華美好きで、
それはかはいい、うつくしい、
花の山査子、百合見たやう。

ところへ背後から蹤けまはす

猶太人とお洒落のおべつか屋、
脇腹めがけて、打つてやろと
かはいそなヂヤックに突つかかる。

その時すばやく、すつと來たは
母鷲鳥のお婆さん、
杖でヂヤックを一寸と打ちや、
道化のアルレキン※に早變り。

つづいて、お婆さんが杖上げて、
綺麗なお嬢さんを一寸と打ちや、
すぐにその子も早變り、
それこそかはいいコランビン。※

金の卵は海の中、
どさくさまぎれに放られる。

だけど、ヂヤックが飛び込んで、
またも元へと取り返す。

それで、雌鶏鳥とつた猶太人の奴、
殺しちまへといきまいた、
割いて、此奴を賣つ飛ばしや、
ポケットにたんまり金儲。

ヂャックのお母さんは、それ見ると、
すぐに雌鶯鳥をひつたくり、
そして、その背にうち乗つて、
お月さま目がけて飛んで行つた。

註、　アルレキン。道化しばゐの男役です。
　　コランビン。これは女役です。

まざあ・ぐうす

駒鳥のお葬式

「誰が殺した、駒鳥の雄を。」
「そォれは私よ。」雀がかう云った。
「私の弓で、私の矢羽で、
私が殺した、駒鳥の雄を。」

「誰が見つけた、死んだのを見つけた。」
「そオれは私よ。」蒼蠅がさう云つた。
私の眼々で、小さな眼々で、
私が見つけた、その死骸見つけた。」
「誰が取つたぞ、その血を取つたぞ。」
「そオれは私よ。」魚がさう云つた。
「私の皿に、小さな皿に、

私が取つたよ、その血を取つたよ。」
「誰が作る、經帷子を作る。」
「そオれは私よ。」甲蟲がさう云つた。
「私の絲で、私の針で、
私が作ろ、經帷子を作ろ。」
「誰が記す、戒名を記す。」

「そォれは私よ。」雲雀がさう云つた。
「明いならば、暮れないならば、
私が記そ、戒名を記そ。」

「誰が會つか、お葬式に會つか。」
「そォれは私よ。」お鳩がさう云つた。
「葬つてやろよ、かはいそなものを、
私が會たうよ、お葬式に會たうよ。」

「誰が堀るか、お墓の穴を。」
「そォれは私よ。」梟がさう云つた。
「私の鍬で、小さな鍬で、
私が堀ろよ、お墓の穴を。」

「誰がなるぞ、お坊さんになるぞ。」
「そォれは私よ。」白嘴鴉がさう云つた。
「經本持つて、小本を持つて、

私がなろぞ、お坊さんになろぞ。」

「誰が鳴らす、お鐘を鳴らす。」

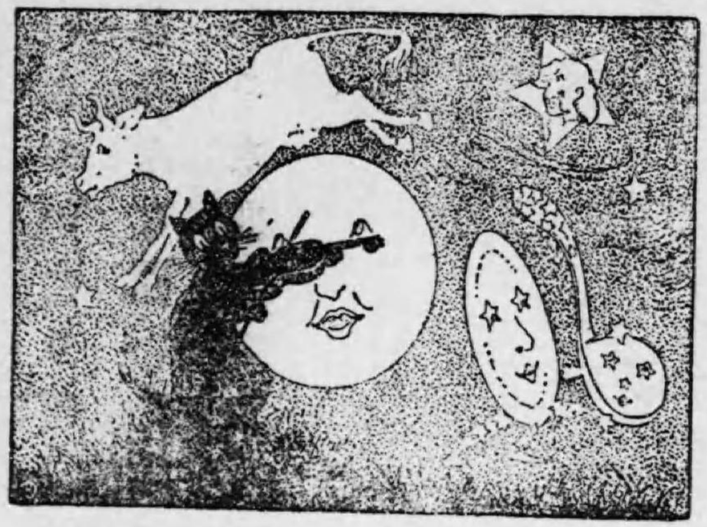
「それは私よ。」雄牛がかう云つた。

「私は引ける、力がござる、

私が鳴らそ、お鐘を鳴らそ。」

空の上からみんなの小鳥が、

ためいきついたり啜り泣きしたり、
みんなみんな聞いた、鳴り出す鐘を、
かはいそな駒鳥のお葬式の鐘を。



お月夜

M.W.T

ひよっこり、ひよっこり、ひよっこりしよ。
猫が胡弓彈いた。
牝牛がお月樣飛び越えた。
小犬がそれ見て笑ひ出す。
お皿がお匙を追つかけた。
ひよっこり、ひよっこり、ひよっこりしよ。

天竺鼠のちび助

天竺鼠のちび助は、
矮小だから太つちやゐなかつた。
いつも足でお歩きで、
食べる時や斷食や致さない。

さて、一ところから駈けて出りや、
決して其處にはもう居らぬ。
聞けば、駈けてるその時は、
どつちみちぢつと爲ちやゐないそだ。
キイキイ啼くのは屢々だ、滅茶苦茶暴れもたま
たまだ。
それが騒いで喚く時や決して默つちやゐなか

つた。たとへ猫から教はらなくとも、
二十日鼠が只の鼠で無いのは御承知だ。

ところで確な噂だが、
ある日、とつぴよくりんに氣が狂れて、奇態な
死方した話。
とても感じのいい、金棒引の人たちは、
彼奴め死んだで生きてる譯ないぞと云つてゐる。

木のぼりのお猿

木のぼりのお猿さん、
落ちた時や、その時や落ちてゐた。

石の上のつん鶏、
立つた時や、其處らにや影も無い。
林檎かちりの婆お内儀、
二つ食べた時や、一對食べてゐた。
水車場通ひの小荷駄馬、
てくる時やじつと立つちやゐなかつた。

拇指ちよん切つた牛殺し、
怪我したその時や、血を出してた。
駈けて蹤いてくお供さん、
疾走する時や、駈け足だ。
お靴そそくる靴直し、
繕つちやつたその時や、爲上てた。

蠟燭作るが蠟燭屋、
型から引つ剝いだ時や手に持つてた。

西班牙指して行つた艦隊、
歸つた時や、またぞろ遣つて來てた。

胡桃

小さな綠のお家がひとつ。
小さな綠のお家の中に、
小さな金茶のお家がひとつ。
小さな金茶のお家の中に、
小さな黃色いお家がひとつ。

小さな黄色いお家の中に、
小さな白いお家がひとつ。
小さな白いお家の中に、
小さな心がただひィとつ。

孟買の肥満漢

一人の肥満漢が孟買にござつた。
ある日、日向で煙草のんでござつた。
そこへ、ついと來たは鷸といふ小鳥よ、
パイプひつ掠つてまたふいと飛んぢまふ。
そこでぢれました孟買の肥満漢。

六片の歌

歌へ歌へ六片の歌を。
衣嚢にや御褒美の麥がある。
二十四匹の黑鶫、
焙じこまれて、パイの中。

パイが剝がれた、その時に、
すぐに小鳥が歌ひ出す。
もともと王様に供へます
綺麗なお皿ぢや、そりや無いか。

『王様は會計院で、
お金の御勘定。

御妃や御居間で、
パンと蜜をめしあがり。
女中さんはお庭で、
衣裳をせつせと干してゐる。
そこへ小鳥が一羽飛んでまゐつて、
つんとはぢきました、女中さんのお鼻。』

一時

いっちく、たっちく、おうやおや。
鼠が時計をかけあがる。
柱時計がチーンとうつ。
鼠がすたこらかけおりる。
いっちく、たっちく、おうやおや。

卵

お乳のよに白い大理石の壁に、
絹の柔軟した薄い膜つけて、
透いて凝つた泉の中に
金の林檎が見えまする。
そのお城に戸一つ無いので、
泥棒共までわりこんで金の林檎を盗み出す。

朝焼夕焼

朝焼小焼、
羊飼の氣がかり。
夕焼小焼、
羊飼の後生樂。

風が吹きや

風が吹きや
まはります、粉挽き車よ。
風が止みや、
とまります、粉挽き車さ

文なし

一文なしの文三郎、文三郎を浚はうと
泥棒どもがやつて來た。
逃げた、逃げた、烟突の素頂邊へ攀ぢてつた。
締めた、締めたと泥棒どもが追つかけた。
それ見て文三郎、そろつと向うへ逃げ下りた。

かうなりや見つかるまい。
駈けた、駈けた、十五日に十四マイル、
それで、振り向いたが、もう誰も見えなんだ。

ファウスト國手

ファウスト國手はいい人で、
時々、お弟子たちを引つぱたく。
引つぱたいて、踊らして、追つ立てて、
英吉利出てから佛蘭西へ、
佛蘭西出てから西班牙へ、
そしてまた、引つぱたいて逆戻り。

ととこと床屋さん

とこ、とこ、床屋さん、
豚の毛刈つちよくれ、
鬢がひィとつほしいけど、
その毛が何本入用ぢやね。
二十四本で澤山だ。
フンとお鼻で御挨拶。

お靴の中に

お靴の中にお婆さんがござる。
子供がどつさり、始末がつかない。
お粥ばつかり、パンも何もやらず、
おまけに、小つぴどくひつぱたき、
寐ろちゆば、寐ろちゆば、この小童ら。

一つの石に

一つの石に小鳥が二羽よ。
ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド、
一羽が飛んでつた、一羽が殘つた。
ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド、
また一羽飛んでつた、誰も無くなつた。

ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド、
石だけぼっつり殘つた。たつたひとり殘つた。
ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド。

コール老王

お年寄りのコオル王は愉快なお爺、
愉快なお爺、
すぐに煙管召して、お酒杯召してね、
そして胡弓彈者を三人ほどお召しで。

どのどの胡弓彈者もいい胡弓持ちでよ、
中で一番なは王樣の胡弓よ、
ツウイ・ツウイヴル・デイ、ツウイヴル・デイ。……
それそれ胡弓彈者が彈き出したよ、おききな。
誰に較べうか、滅多にまた無かろ、
コオル王樣とその胡弓彈者よね。

雨、雨、行つちまへ

雨、雨、行つちまへ、
またいつか來なよ。
早よ出て遊ぼに。

花壇に豚

お庭の花壇に豚が出た。それ行つて捕つつかめ。
穀物畑に牛が來た。走れ、走れ、男の子。
クリイムのお鍋に猫がゐる。走れ、走れ、女の子。
山火事だ。走れ、走れ、男の子。

日の照り雨

日の照り雨、小半時ももてぬ。

セント・クレメンツの鐘

のぼれいそいそ、また下りなされ、
鐘はロンドン、つけば數ござる。
「柑子に檸檬」よ。
セント・クレメンツの鐘が鳴る。

「標的と、標的の星」
セント・マアガレッツの鐘が鳴る。
「煉瓦に瓦。」
セント・ギルスの鐘が鳴る。
「半片※にファシング。」
セント・マアルチンスの鐘が鳴る。

「麵麭菓子にお煎餅。」

セント・ビイタアスの鐘が鳴る。

「二本の洋杖、一つの林檎。」

ホワイト・チャペルの鐘が鳴る。

「灰掻、火箸。」

セント・ジョンスの鐘が鳴る。

「湯沸、お鍋。」

セント・アンヌの鐘が鳴る。

「バルドペエト爺さんよう。」

オルトゲエドの緩ろい鐘。

「汝に十志貸しがある。」

セント・ヘレンスの鐘が鳴る。

「いイつ拂うてくれるんじゃ。」

古るいべエレエの鐘が鳴る。

「俺が金持になつたらな。」

ショルヂッチの鐘が鳴る。

「そしたら賴むよ。」

ステプニイの鐘が鳴る。

「俺ん知つたこつかい。」と

ボウの大きな鐘のこゑ。

さあ來た、手燭がお床へ汝を照らしに來た。

さあ來た、屠人が汝のそつ首ちよんぎるぞ。

荊棘のかげに

荊棘のかげに、
ひもじさ、寒むさ。
花咲くかげに、
白金、黄金。

お馬乗り

貴夫人の馬乗り
ツリイ、ツレ、ツレ、ツレエ、
ツリイ、ツレ、ツレ、ツレエ。
貴夫人の馬乗り。
ツリイ、ツレ、ツレ、ツレエ。ツリ、ツレ、ツレ、ツレエ。

紳士の馬乗り。
ガッロップ・エ・ツロット。
ガロップ・エ・ツロット。
紳士の馬乗り。
ガロップ・エ・ガロップ・エ・ツロット。
お百姓の馬乗り。
ホップルデイ・ホイ、

ホップルデイ・ホイ。
お百姓どんの馬乗りやこんなもんぢや、はあ。
ホップルデイ、ホップルデイ・ホイ。

小徑に娘

小路のほとりに一人の娘が、
何だか言つてるけど、はつきりや言へないで、
ぐつつ、ぐつつ、ぐつつ。
向うの小岡に一人の男が、
立つてはゐれども、じつとしちやゐられず、
ひよつこり、ひよつこり、ひよつこりしよ。

月の中の人

月の中の人が、
ころがつて落ちて、
北へ行く道で、
南へ行つて、
凝えた豌豆汁で、
お舌を燒いて焦がした。

十人の黒坊の子供

十人よ、黒奴の子供が十人よ、
お午餐に呼ばれて行きました。
一人が咽喉首つまらした。
そこで九人になりました。
九人よ、黒坊の子供が九人よ、

どの子もどの子も朝寝坊で、
一人がたうとう寝過した。
そこで八人になりました。
八人よ、黒坊の子供が八人よ、
一緒にデボン※を旅して、
一人が途中で留まつた。
そこで、七人になりました。

七人よ、黒坊の子供が七人よ、
杖伐りにと行つたれば、
一人が眞二つに腹切つた。
そこで、六人になりました。
六人よ、黒坊の子供が六人よ、
蜂の巣いぢつてついい遊び、

一人が熊蜂に螫された。
そこで、五人になりました。
五人よ、黒坊の子供が五人よ、
喧嘩して御訴訟を起した。
一人が裁判所へ行きました。
そこで、四人になりました。

四人よ、黒坊の子供が四人よ、
みんなで海へと出かけたら、
赤い鯡に一人が呑まれ、
そこで、三人になりました。
三人よ、黒坊の子供が三人よ、
こんどは動物園へ行つたれば、
大きな熊奴が一人を引つ抱へ、

そこで、二人になりました。
二人よ、黒坊の子供が二人よ、
てんとさんの中へと坐り込み、
一人がちぢれて焼け死んだ。
そこで、一人になりました。
一人よ、黒坊の子供が一人よ、

いよいよ、たつた一人よ、
その子がお嫁取りに出て行つた。
そこで、誰も無くなつた。

※ いぎりすの西南部の一縣で、
デボンシイルのことです。

お月さまの中のお仁が

お月さまの中のお仁が、
お月さまの外を眺めて、
そして、かうお仰るわ。
今、今、わたしは起きかかる。
赤子のみんなはいま寝まる。

クリスマスが來
いわすや

右や左や、クリスマス。
鵞鳥が肥つてこまりやす。
どうぞや一ペンニイ、
爺奴が帽子に放りこんで下され。
一ペンニイがおいやなら半ペンニイでもようござる。
半ペンニイでも無いならば、
御機嫌よろしう、旦那さま。

べああ、べああ、黑羊

べああ、べああ、黑羊、お前はいい毛をお持ちだろ。
はい、はい、嚢に三嚢ございます。
且那様に一ふくろ、
奥様に一ふくろ、
だつけど、そこいらの細道で、
べそかく坊つちやんにや、いイやいや。

蠟燭

小ぴ子、
名前はナンシイ・エッチコウト、
白い下袴に
赤い鼻持つて、
長く立つてるほど、
短くなつて了ふ。

小つちやなテイ・ウイ

小つちやなテイ・ウイは海へ行き、
棚無し短艇に乗りこんで、
ゆらゆら搖られてゐるうちに、
小つちやな短艇がひつくりかへり、
これでお話もおォしまひ。

三月、風よ

三月、風よ、四月は雨よ、
五月は花の花ざかり。

お面持

グレゴリイ・グリッグスさんは、
グレゴリイ・グリッグスさんは、
二十と七つのお面持でおじやつて、
取つかへひつかへ、ひつかへ、取つかへ、
街中をやんやと笑はせる。
東へ行つちや引つかぶり、

西へ行つちや引つかぶり、
それでも、どの面が一番お好きか、
やつぱり御本人でお云ひやれぬ。

獅子と一角獸

獅子と一角獸と
ふたりで王位を競り合つた。
獅子が强かつたで、
街を上下大暴れ、
そこで、白麵麭やつたり、
黑麵麭やつたり、

乾葡萄入菓子やつたり、
やつとこすつとこ追ひ出した。

靴屋さん

靴屋さん、おうち。
はい、はい、今日は。
お靴のつくろひたのみます。
よしきた。合點だ。
こちに一釘、そちらに一釘、
とんとんとんとんのとん。

綺麗な頸卷

ヂイニイ、結びに來とくれよ。
ヂイニイ、結びに來とくれよ。
ヂイニイ、結びに來とくれよ。
私の綺麗な頸卷を。

私はうしろで結んでよ、

私は前で結んでよ。
私は何度も結んでよ。
もうもう私はかまやせぬ。

何人何匹何嚢

セント・イブへと私がお參りする時に、
私が逢つたは男一人にお神さんが七人、
そのどのお神さんも嚢を七つ、
そのどの嚢にも猫奴が七つ、
そのどの猫にも小猫が七つ。
セント・イブへこお參りするのが
さてさて、何人何匹何嚢。

飲むもの

世界中が一つのパイならば、
海がすつかりインキなら、
木がまたチイスとパンならば、
俺たちの飲むものそりや、何だ。
それこそ甲羅經た爺奴でも
頭をかかへて一寸とまるろ。

かはいい小猫

「かはいい、かはいい小猫や、
何處へお前は行つてたの。」
「私は行つてたのロンドンへ、
女王さァまにお目見よ。」

「かはいい、かはいい小猫や、
其處でお前は何したの。」
「女王さァまのお椅子の下で、
鼠を一匹つかまえた。」

雨模樣

犬と猫とがお友達に逢ひに、
鳥渡と、街から連れ立つてまゐる。
猫が申します。
「お天氣はどうでしよね。」
犬が申します。
「さやうさ、奥さんえ、雨がふりそでございますが、

御心配はいりません、手前が蝙蝠傘持つてます
でな。
その時や御一緒に、相合傘とはいかがでしよ。」

ボウリイ、藥鑵を

ボウリイ、藥鑵を掛けときな。
ボウリイ、藥鑵を掛けときな。
ボウリイ、藥鑵を掛けときな。
みんなが飲むんだ、お茶だよ。
スケイ、そいつをおはづしな、

スケイ、そいつをおはづしな。
スケイ、そいつをおはづしな。
みんながもうもう行つちやうぞ。

南瓜つ食ひ

ペエタアさん、ペエタアさん、南瓜つ食ひ、
女房持つてもお守りが出來ず、
南瓜の殼にとどしこんで、
やつとこ、ほくほくお守りした。

ぼう、うおう、うおう

ぼう、うおう、うおう、
お前さん何處の犬、
わたし、チンカアさんの犬ですよ、
ぼう、うおう、うおう。

三百屋

ドムミイ・ツロットさん、三百屋、
寢臺を賣つて、
藁の上へごろりよ。
その藁賣つて
草の上へごろりよ。
そしてお内儀さんに姿見鏡一つ買うてくりよ。

お釘が減れば

お釘が減れば、
蹄鐵失せる。
蹄鐵減れば、
お馬が失せる。
お馬が減れば、
乘者が失せる。

乘者が減れば、
戰が失せる。
戰が無いと、
王樣のお國や失せる。
お馬の蹄鐵が減つたせいでよ。

二十四人の仕立屋

二十四人の仕立屋が
蝸牛殺しに、えつさつさ。
滅多に尻尾にや觸れまいぞ。
そりやこそ蝸牛が角出した、小さなカイロ牛そ
つくりだ。
逃げ逃げ、逃げなきや今にも殺される。

蝸牛角出せ

蝸牛、蝸牛、角出せや、
お父さんもお母さんも死んで了ふた。
お前の御兄弟姉妹は裏ん口の庭で
パンをお呉れェと乞うてゐる。

お針見つけたら

お針見つけたら抓み上げてお取りな。
その日いちんち、いい事ばかり。
お針見つけてその儘爲ときや
その日いちんち惡い事ばかり。

風よ吹け吹け

風よ、吹け、吹け、
挽臼廻せ、
粉屋粉挽き、
パン屋さんが捏ねて、
朝はほやほや蒸かし立て。

氣輕な粉屋

氣輕な粉屋が
デイ河にござる。
朝から晩まで
働らいちや歌ふ。
巫山戯てばつかり、
一つ事ばかり、

お極まり文句で
一つ事ばかり。
『誰にかまふもんか、いやいや、私や、よ。
誰が構ふかよ、このわしに。ホイソラ、ホイソラ。』

お籠の婆さん

お婆さんが一人お籠に乗つて、
ふらふら上る、
月より高く、九十倍も高く、
何處へ行くのか、訊かうにも訊けず、
お手々に箒を持つて、あれあれ上る。

『お婆さん、お婆さん、お婆さん、
何處、何處、何處へ、
そんなに高く上がつて。』
『圓天井の煤掃じや。』
『早く歸つて頂戴よう。』
『あい、あい、今に今に。』

田舍漢

田舍漢のおたづねだ。

『一體海に苺が何本あるだ。はあ。』

うまく返字をしてのきよか。

『森に何匹鯡があるだ、はあ。』

素つ頓狂な南京さん

素つ頓狂な南京人がお三方ござつた。

それは皆樣とくより御承知だ。

きやつきや騷いで獵にと出かけた。

而かも、滅相も無い、安息日にでござる。

永の終日、獵をして廻り、

これと云ふもの根つから葉つから見つからない。

一つ見つけたは帆かけた船よ。

それが追風にしゆつしゆつと走つた。

「あれは船だ。」と一番先のが云ひ出した。

「なんの、嘘だ。」と二番目のが打ち消した。

「あれは家さ。」と三番目のが云ひのけた。—

「壊れ煙突まで取つついてるちやないかいな。」

永の一晩獵をして廻り、

これと云ふもの根つから葉つから見つからない。

一つ見つけたはお辻り屋のお月さんだ、

それが吹かれてつるつると辻つた。

「あれはお月さんだ。」と一番先のが云ひ出した。
「なんの、嘘だ。」と二番目のが打ち消した。
「あれは乾酪さ。」と三番目のが云ひのけた。—
「二つ割にしたその半分きりさね。」
またも終日獵をして廻り、
これと云ふもの根つから葉つから見つからな
い。

一つ見つけたは木苺藪の蝟鼠
それを後に通り過ぎて了ふ。
「あれは蝟鼠だ。」と一番先のが云ひ出した。
「なんの、嘘だ。」と二番目のが打ち消した。
「あれは針差さ。」と三番目のが云ひのけた。—
「よくも滅茶苦茶にお針を差したもんだすな。」

またも夜つぴて、獵をして廻り、
これと云ふもの根つから葉つから見つからな
い。
一つ見つけたは蕪畑の野兎だ。
それを見棄てて行つて了ふ。
「あれは野兎だ。」と一番先のが云ひ出した。
「なんの、嘘だ。」と二番目のが打ちけした。

「あれは犢さ。」と三番目のが云ひのけた。——
「彼奴、牝牛に置き去りされた奴だんね。」
またも終日、獵をして廻り、
これと云ふもの根つから葉つから見つからな
い。
見たは洞木の分別顔の梟よ。
それを後にまた行つて了つた。

「あれは梟だ。」と一番先のが云ひ出した。
「なんの、嘘だ。」と二番目のが打ち消した。
「あれは爺さ。」と三番目のがいひのけた。—
「それそれ胡麻鹽頭の髪の毛を見さいな。」

鼻曲り

彼奴やよつぽど妙だ、直つ直ぐにや行かぬ。
その譯知つてるか、
鼻の向いた方へ向いて行く。
道理で、奴さん、鼻曲り。

あの丘のふもとに

あの丘のふもとに
お婆さんがござつた。
若しも去なんだら
まだ住んでござろ。

ゆりかごうた

ねんねや、ねんねや、おねんねや。
坊やがお父さん羊守。
お母さんはねんねのねむりの木、
ねんねやねんねとゆすりませう、
ゆすればお夢がふりかかる。
ねんねやねんねや、おねんねや。

あたいの牝牛

あたいの牝牛は小つぼけだ。
ひよろひよろ、ひよっこり、ひよっこりよ。
あたいの牝牛は、小つぼけだ、
牝牛の腓は小つぼけだ。
ひよろひよろ、ひよっこり、ひよっこりよ。
私のお歌はまだ半

あたいの牝牛は小つぼけだ。
ひよろひよろ、ひよっこり、ひよっこりよ。
あたいの牝牛は小つぼけだ。
やつとこ牛小屋へ追ひこんだ。
ひよろひよろ、ひよっこり、ひよっこりよ。
そこでお歌もちやんちやんだ。

小びつちよの子供は

小びつちよの男の子は何で作る。何で作る。
小びつちよの男の子は何で作る。
蛙と蝸牛と小狗の尻尾で作られた。
それそれ、小びつちよの男の子が作られた。

かはいい女の子は何で作る。何で作る。
かはいい女の子は何で作る。
お砂糖に薬味に、甘いものづくめ、
それそれ、かはいい女の子が作られた。

ねんねこうた

ねんねこ、ねんねこ、ねんねこや。
泣いてお母さんを泣かすなや。
泣かれりや私も辛ござる。
ねんねこ、ねんねこ、ねんねこや。

はしっこいヂャック

はしっこいヂャック、
すばやいヂャック、
蠟燭立一つ
ヂャックが
飛び越した。

蝸牛、でむし

蝸牛、でむし。
盗人が來るぞ汝ちの壁を
ぶつこはしに來るぞ。
蝸牛、でむし。
その角出せよ、
盗人が來るぞ、穀物奪りに、
盗人が來るぞ、夜明の四時に。

一列こぞつて

一列こぞつて、
弓をひき、
お鳩を射つたら、
鴉奴を殺した。

蝸牛

蝸牛、蝸牛、角出せや。
麺麭とお麥を、それ、あげよ。

お悧巧さん

とても不思議なお悧巧さんがござつた。
ばんばら藪へいきなり飛び込むと、
眼玉をポンポン引ん剝いた。
おやおやつ、眼玉が飛び出たら、

それこそ今度は糞力、
横つちよの小藪へ飛び込んだ。
そして眼玉をすつ込ました。

おしやべり

山雀のおしやべり、
お舌が裂けよぞ。
町中の犬が
ちんぢんに咬んぢやふぞ。

ハアトの女王

ハアトの女王がお饅頭を作られた。
夏の日いつぱいかゝつた。

ハアトの兵士がお饅頭を盗んだ。
みんな持つて逃げてつた。

ハアトの王様がお饅頭とお仰つた。
さあ大變、兵士を御折檻なすつた。
ハアトの兵士がお饅頭を返した。
それこそ閉口して、もうもう眞平だ。

コケコッコ踊

コケコッコ、コケコッコ、コケコッコ。
奥さんがお靴を失くした。
且那さんが提琴の弓を失くし、
どうしていいのか大弱り。
コケコッコ、コケコッコ、コケコッコ。

おやおや、奥さんどうなさる。
且那さんが提琴の弓を探す、
それまで、裸足でお踊りか。

コケコッコ、コケコッコ、コケコッコ、
奥さんがお靴を失くした。
且那さんが提琴の弓を見つけ、
それきた、コケコッコ、コケコッコ。

コケコッコ、コケコッコ、コケコッコ。
さあさあ、奥さん、それ踊ろ、
且那さんが提琴の弓をこすり、
それそれ踊れと、コケコッコ。

コケコッコ、コケコッコ、コケコッコ。
奥さんがお靴を失くした。

寝ても寝られず大弱り。
頭の髪毛も滅茶苦茶。

でんでんむしむし

でんでんむしむし。角引けよ。
引かなきや山椒の粒ふりかける。

お婆さんと息子

一人のお婆さんと三人の息子、
ヂエリイ、ヂエムス、それにまたヂヨンよ、
ヂエリイは首くくつた。ヂエムスは溺れた、
ヂヨンは何處かへゐなくなつて了つた。
誰も見つけた者が無い。
三人の息子がみんな死んで了つた。
ヂエリイ、ヂエムス、それにまたヂヨンよ。

てんたう虫

てんたう蟲、てんたう蟲、
早う家へ歸れ、
お前の家や火事だ。
みんな子供は燒け死んだ。
娘のアンヌがたつたひとり、
プツヂングの鍋の下に

つんぐりむんぐり潜ぐつた。

暖かい麺麭

温かい麺麭、暖かい暖かい暖かい麺麭。
一つが一ペンニイで、二つが二ペンニイ、
暖かい麺麭。
お前に娘がないならば、
お前の息子にお上げなえ。
一つが一ペンニイで、二つが二ペンニイ、
暖かい麺麭。

ゴオサムの三悧巧

さてもゴオサムの三悧巧、
お椀に乗つかつて海へ出た。
もそつとお椀が確りさへ爲てりや、
ここらで此の歌も切れやしまい。

氣ちがひ家族

氣ちがひの御亭主に、
氣ちがひのお内儀さん、
氣ちがひ小路に住んで、
三つ兒を生んで、
どの兒もどの兒も氣がちがた。
お父さんが氣ちがひ、